
雑文

ヤマネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雑文

【Nコード】

N5490V

【作者名】

ヤマネ

【あらすじ】

書きなぐり。

基本的にどうにも煮詰まった時とかに吐き出します。よって非常にアレなものになるかと思われます。

辺境のゝ 覚書（前書き）

作者のメモ。

こういうの出すべきじゃない気もするけど、ここ見てる人ほぼいな
いし良いかな。

[illegible]

エルフの〈神祇官〉でレベル90。サブは〈料理人〉でこっちのレベルも90。

へエルダー・テイル」歴10年のベテランプレイヤー。本人は否定するがヤエ曰く「黒剣もドン引きレベル」な廃人。

身長168cm。長身の細身で、腰までかかる程度の黒髪のアトヘア。長身はコンプレックスらしい。

3ヶ月前まで〈D. D. D〉に居たっぽい。当時は主要人物だったみたいなのがする。

「へホネスティ」のギルドマスター、アインスとは旧知らしい。へ神祇官」つながりか。

〈黒耀の袴〉と神剣が（秘宝級）アイテムらしい。

3

[illegible]

ヤエザクラ。通称 ヤエ

ハーファルヴの〈妖術師〉でレベル46。サブは現状不明。

櫛と同じレベルでベテランプレイヤーだが、何度もキャラクターを変えている。本人は否定するがクシ曰く「最低でも私以上」の廃人。レベル90の別キャラが最低3人は居るらしい。そのうち2人は男性キャラでいわゆるネナベ。一人は〈守護騎士〉。

今のキャラクターは数ヶ月前に作り直したばかりで、スキルや装備は初心者レベル。

にゃん様、山ちゃんはクシと共通の友人。ともに付き合いは長そう。レベル90キャラの時には〈D・D・D〉に居たかもしれない。

身長152cm。標準体型で、目が大きめで童顔なため年齢よりも幼い印象。

髪型は毛先にパーマが入ったショートボブでハニーブラウン。

コスプレイヤーらしい。

[illegible]

ユウタ。本名（山城 雄大）

人間の〈モンク〉でレベル46。サブは〈調剤師〉。

5年前に1年ほどのプレイ経験があり、その際は盗剣士のレベル7

当時の最高レベルは80であるため、経験的には中級者以上と思われる。

身長176cm、体型の細マッチョはゲームキャラ化の影響。

髪型は眉に掛からない程度の短めショートレイヤーでアッシュブラ

ウン。糸目。

格闘ゲームオタクで、カンフー映画好き。クシ、ヤエよりも1つ2
つ程度年上っぽい。

— — — — —
— — — — —

ダルタス。通称 ダル太

人間の〈守護騎士〉でレベル52。サブの及言はいまのところなし。
〈D・D・D〉に所属する中級者。でも能力的には初心者にちよい
と毛がはえた程度のプレイヤー。

〈D・D・D〉に入っただのはまだ3ヶ月未満のこと。

中の人は高校生。サッカー部所属で、レギュラーのボランチ。体育
会系。

— — — — —
— — — — —

ミヅホ

人間の〈吟遊詩人〉でレベル48。サブは〈狩人〉。

ゲーム時には弓をメイン武器にしていたが、現在弓が苦手の模様。

〈グランデール〉に所属している中級者。初心者のお手伝いをよく
している面倒見の良い性格。ちよいボケ。

中の人は沖縄から上京してきた女子大生。

身長165cm、頭の後ろで一つの三つ編みにまとめられたちよつ
と癖のありそうな茶色い髪。浅黒い肌と目鼻立ちのくっきりした顔。
小さい頃から三線を習っていて、〈吟遊詩人〉を選んだのもその影
響。

— — — — —
— — — — —

テンプルスайд残留組では一番低レベル。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

エルフの〈召喚術師〉でレベル38。サブは〈料理人〉。

携帯食作るよゝっていった人。

残りテンプルサイド残留組

遊詩人——サブ未定

 未定

殺者
——サブ未定

 未定

 未定

術師

サブ未定

キューリー
〈グランデール〉

療神官
サブ未定

アキオミ	〈無所属〉	LV29	男性	狼牙族	吟
遊詩人	—サブ未定				
アマネ	〈無所属〉	LV29	女性	猫人族	暗
殺者	—サブ未定				
***	〈未定〉	LV28	男性	人間	吟
遊詩人	—サブ未定				
***	〈未定〉	LV26	男性	人間	盗
剣士	—サブ未定				
***	〈グランデール〉	LV26	男性	人間	武
闘家	—サブ未定				
***	〈未定〉	LV26	男性	人間	神
祇官	—サブ未定				

[illegible]

へエルダー・テイル」を始めたあたりでクシの後輩ポジションだった模様。

ヤエも先輩と呼ぶあたり、その当時つるんでいたのか。

現在へD・D・Dの主要人物らしい。ギルド内では怖がられているっぽい。

[illegible]

クシよりもへエルダー・テイル」経験が長く歳も上っぽい超ベテランプレイヤー。サブは「料理人」。

年少者を見守るようなプレイスタイルらしい。

語尾から考えるに「猫人族」っぽいような予感。

通勤電車と宝塚

湿度が高い。空気が薄い。暑い。眠い。頭がくらくらする。

現在午前8時半、私達は通勤電車内でおしくら饅頭を体験中。ぎゅうぎゅうである。

一番先頭の女性専用車両というのを選んだのだが、これは失敗だったかもしれない。女子高出身者ならばご存知かもしれないが、女性ばかりが集まった場合の女性臭と化粧や香水の香りがあいまって、それがとても濃いのだ。

これは徹夜明けの体調にはなかなか来るものがある。

何故にサラリーマンでもない私達がこんな状況に陥っているかを簡単に説明すると、呑み会の後に朝までコースに突入して、帰る間もなく2限の大学の授業に直行の為ということになる。

もう少し詳細を説明すると、私のプレーする某有名オンラインゲームにて、同じチームというかグループに所属するプレイヤー同士がゲーム外、いわゆるリアルで集まるという通称オフ会というものが企画されたのがきっかけ。

参加者の年齢が高めなこともあり、それが都内某所のチェーインの居酒屋での開催となり、妙な盛り上がりを見せた後一部の参加者は2次会のカラオケになだれ込み、終電を逃した数名でネットカフェに突入。本末転倒だと今になると思うのだが、オフ会であるにも関わらずネットカフェでその某ゲームを始め、始発が動き出して結構な時間がたった今頃になって移動を開始したというのが現状までの経過である。

「うゝ、ぎもぢわるいゝ、息がでないゝ」

背が低い為、私の横で他の乗客の中に埋もれるようになってるのは、そのオンラインゲーム仲間のヤエ。

ゲームを始めた時期も年齢も近く共に都内在住ということもあり、ゲーム内でもリアルでも行動を共にすることが多い、まあ多分親友といえるだろう存在だ。

「ヤエはあと2駅だったか。私はまだ30分ほどこれに乗ってなくちゃいけないんだから我慢しろ」

「クシは背高いからいいじゃん。私のコレはほんときつついんだって・・・」

「背が高いことの数少ないメリットなんだから、そこだけ文句を言われても。まあ社会勉強だと思って諦めるしか？」

などと話をしていると駅に到着。人の出入りが多い駅のようだ。奥のほうから人を押しのけ出口に向かう人、降車が終わっていないのに乗車しようとする人、阿鼻叫喚である。

いやこの状況、もう入ってくるのは無理だろうというのにホームからはまだ数人、体を押し込もうと突入してくる。サラリーマンとはかくも厳しい日常を送らねばならないのか・・・

「無理なご乗車、駆け込みでのご乗車は大変危険ですのでおやめください！」

「もう一步、もう一步車内の中ほどにお詰め願います！」

この車両を担当する駅員さんは女性のようだ。せっぱつまった高い声が徹夜明けの頭に響く。

「もう一歩って、ヤエ半分くらい体浮いてるんだけど・・・」

「む、私も片足立ち状態で動くとか無理。う、体が斜めになってて足つりそう・・・」

どうにかドアは閉まったようで、ゆっくりと電車は動き出す。

これ以上の混雑はありえないだろうと思っていたのだけど、先刻よりも外部からの圧力は増している気がする。肋骨にヒビが入るんではなからうか。

「なんていうか、同姓には厳しくなるっていうけどさ、朝から女性の駅員さんの金切り声ってのはムカつてきちゃうんだけど。もうちょつとどうにかならないもんなの？」

やっとで着地できて一息ついたヤエが、不満げにそんな事を言う。

「甲高い声というのはイライラ度を増す要因にはなりそうな気がするな、確かに。とはいえ駅員さんも必死なんだから、そう邪険にするのも失礼じゃないかい？」

「うー、せめてもうちょつと落ち着いた声を出してほしいわけなのよ、ヤエとしては。たとえばさ、宝塚の男役みたいなのとかさ」

「む、あれか？ 『お嬢さん、もう一歩車内の奥まで詰めてはいただけないだろうか』 とか言うのか？」

試しに声は低めでお腹から声を出すような感じで言ってみる。もともと私の声は低めなのだ。ちなみにセリフは某ブルボン朝フランス王国首都の刺がある花あたりを連想して。

「そうそう、そんな感じ。クシ上手いじゃん」

「そう？それじゃ、『無理な乗車は危険だ。駆け込みでの乗車などもつての外。怪我などしてしまつては元も子もないだろう？次の電車を待ってみてはどうだろうか』とかは？」

言い訳をさせてもらえるなら、あれだ。徹夜明けの妙なハイテンションというか、後から考えると下らないことが妙に面白かったりするあれだったのだと思う。何故かとても楽しかったのだ。

「いいかも、せっかくだから昨日の居酒屋とかで注文するときも、そうしたら楽しかったかも」

「なるほど。『そこのお嬢さん、ナマ中を2杯お願いしたいのだが。ああ、ネギマも同じく2本頼みたい』とかだな」

その時、車両は次の駅に止まり、ドアが開いた。

「それじゃ、ヤエここで降りるから。また夜ね」

「え？」

ニヤニヤ笑いながら、ヤエが人ごみと共に去っていった。

この駅は降車が多いらしく、今までの混雑が嘘のように社内に残された人数は少ない。

なんだか、妙な視線を周りから感じる。あ、なんか笑いを堪えている人がいる。

ぐ、やられた。またしてもヤエに・・・

その後、私は降車駅でもない次の停車駅で逃げるように降車し、
2限目の授業に遅刻した。

凛々 01 (前書き)

厨二どころじゃない酷い妄想。
戻るボタン推奨。
続くかどうかすら未定。

凛々 01

バイトを終え、通っている大学の近くに借りた築30年級のボロアパートに帰りついた僕を出迎えたのは、妖艶という言葉がそのまま現実化したかのような和服姿の女性だった。

花魁姿とでも言うのだろうか、黄色と緑青色を基調としたなんとも派手な和服。少し着崩れた後ろ襟から覗く項がなんとも色っぽい。しかし頭に乗っかっている髪飾りであろう物体だけが妙に浮いて見える。なんだあれ？ 音響カプラー？

で、その美女がちゃぶ台の上に設置された、バイト代を貯めてつい先日買ったばかりのWindows95搭載パソコンの前で片肘を付きながらカチカチとマウスを操作しているのだ。

見慣れた筈の部屋が異空間と化している。

しばし玄関で靴も脱がず呆然としてしまったのだが、このままではまずかろう。

勇気を出して声を出す。

「ええと、どちら様でしょうか？ 多分ここは僕の部屋だと思うんですが・・・」

その声で初めて僕が存在に気づいたのか、ぴくっと小さく肩を震わせた後、その和装の女性がこちらを振り向く。

「おお、ぬし様、お帰りであったか。しかしなんじゃそ他人行儀な態度は。数えきれぬ程の夜を共に過ごしたわらわに対してどちら様とは何ともつれない言葉・・・」

その正体不明の美女はそんな事を言って不機嫌な顔をする。
拗ねたような表情と声色は、最初に受けた印象に比べると何だか
あどけないのだが、発せられた言葉の内容はとんでもない。

ぬし様？ 夜を共に？ こんな美女にそんな事を言われるような羨
ましい経験をした覚えなんか微塵もない。自慢じゃないがどうか
ならないが、僕は生まれてこのかた彼女なんか居たためしがないの
だ。

「・・・ええと、部屋を間違ってるとか、人間違いとかじゃないで
しょうか。僕にはあなたみたいな美人の知り合いは居ませんし、つ
れないと言われても困ります」

その僕の言葉で何か気づくことがあったのか、その彼女はちよっ
と驚いたような表情をした後、一転して笑顔を見せる。

「美人とは嬉しいことを言ってくれるの。そういえばこの姿でまみ
えるのは初であつた。わらわは・・・そうじゃのう凛々とても名乗
っておこうか。何の凛々かは自分でもまだよう判っておらんのじゃ」

しかし相変わらず言っていることはさっぱり得ない。この姿
ってなにさ。

「何者かと問われて答えるのならば、ほれ、あそこに転がっている
ぬし様の使い古したエプソンのPC98互換機。それにあの中に巢
を張っておった女郎蜘蛛が加わり九十九となって形を成したのがわ
らわだという答えになるじやろうなあ」

彼女、仮に凛々さんとしようか、はその顎に細い指をあて、首を

傾げながらそんなとんでもない事を言う。

「ええと、九十九ってのはツクモ？ 付喪神とか妖怪とかそういう類ってことですか？」

「さすがは主様、理解が早くて助かる。そうじゃの、わらわは古に法力比べで敗れた僧の経文から生まれたとされる由緒正しき付喪神、経凛々様の眷属。人の生み出す言葉や文字に込められた念が具現化した存在じゃ」

由緒正しいとは言うが、残念ながらそんな名前の神様や妖怪は聞いたことがない。まあそっちの知識はゲゲゲの鬼太郎でくらいしか知らないわけだけれど。

「わらわの一部を成す蜘蛛の名前の由来は女郎または上臈とされておる。上臈とは高位の僧侶という意味をもつこともあるからして、経凛々様の眷属としてわらわが世に解釈されたのも、さほど無理が有る話でもなからう？」

凛々さんは「どうじゃまいったか」とでも言うかのように胸を張って自慢気に答える。零れそうで目のやり場に困る。

まあ要約すると、中に住んでたクモと古いパソコンが一体化して化けて出たと。僕が暮らすこの現代日本というのは、思っていたよりもファンタジックな世界なのだろうか。

いやいやまてまて。

思わず納得してしまいそうになったが、そんな事が早々起こってたまるものか。

「その理屈はおかしいでしょ。付喪神っていったら何十年も大事に使い込まれた物に宿るとかそういうのですよね？ 確かにその98

互換機はそれなりに古いですけど、せいぜい作られてから数年しか経ってないじゃないですか！」

そうなのである。つい先日まで使っていたあの98互換機は大学の合格祝いに両親から買ってもらったもので、使い始めてまだ3年くらいしか経っていない。

そんな年数で何かが憑いてしまっていたのは日本全国、八百万では済まないレベルの物の怪天国だ。

「そこはぬし様がパソコン通信やらニュースグループやらの閲覧に熱心じゃったからの。利用者同士の文字を介したやりとりから生ずる念には事欠かん。最近では色々な場所で新参者の礼儀がなくなるとか、昔からの住人が横柄だとかのいさかいが盛んであったじゃろ？　そういったこの国の至る所から発せられる反発やら個人攻撃やらの感情が乗った文字が溢れて、とうとうわらわに自我が生ずるまでになったというわけじゃ」

「いやいや、それじゃあ世の中パソコン通信やってる人にはもれなく美人の付喪神プレゼント的な怪しいキャンペーン状態じゃないですか！あれですか、通信会社の新たな販促戦略とかですか？　だとしたら豪華すぎでしょ！」

「自分で気づいているかは知らんが、ぬし様はかの有名な西寺の守敏大徳様の末裔じゃしの。その霊力にあてられなければこんな事にはなりやせんから安心せい。まあ、故にこそ、ぬし様はわらわのぬし様というわけじゃな」

またも「かの有名な」なんて言っている人名にさっぱり聞き覚えがありません。おまけにご先祖様らしいという。

ううむ、そっちの世界では有名なのか、僕の知識があまりに貧相

なのか。

「そうそう、ちなみに美人とぬし様が褒めてくれるこのわらわの容姿じゃが、ぬし様が主様が毎晩覗いておる女性の裸体を多数掲載したサイトから保存した画像の傾向に影響を大きく受けておるからの」

夜を共にってそういうことですか！ それって毎晩のように見ているアレなサイトや98互換機でやっていたアレなゲームも知られつつあるってことですか！

「若いの、ぬし様」

そういうと凛々さんは、妖艶にニヤリと笑った。

らいとすたっふ

「右手前方、1km程先に見えるあの篝火の中心、目標の将軍が居る部隊で間違い無いでゴザルな」

偵察から戻った〈D・D・D〉のメンバー、通称ゴザルが報告する。

口調と性格こそアレだが、彼は私が〈D・D・D〉に所属していた頃からのギルドの中心人物の一人で、装備も腕も経験も一流のトップクラスの〈冒険者〉だ。まあ、口調と性格はアレなのだが。

私達は現在、ザントリーフの山間深く、200匹ほどのゴブリンの集団が駐屯する谷間を眼下に見下ろす、山の中腹にて、作戦前のブリーフィング中だ。

事の始まりはクラスティ君から私に届いた出動要請。

ザントリーフ半島掃討戦から1ヶ月ほど過ぎた現在、〈ハイスタル〉のゴ布林退治は中級レベルの冒険者に対して円卓会議が討伐クエストを発行するという形で、「完全に殲滅はしていないが、この前のような大規模な進軍は抑える」という状態に落ち着いてきている。

しかし1週間ほど前にこのザントリーフ山間にて、ゴ布林将軍の姿と中規模の軍団が目撃されたことで少々事態が変わる。

ゴ布林将軍はモンスターとしてのレベルは高くはないものの、率いる軍団は一介の冒険者パーティーにとっては少々やかいだ。円卓会議では、これ以上軍団が大きくなる前に頭を潰して脅威を減らそうという意見でまとまったと聞いている。

その結果が何故かこの私を含む〈D・D・D〉の精鋭メンバーによる、いわゆる將軍暗殺計画というわけだ。

「名高い〈突貫黒巫女〉にこんなつまらない仕事をお願いするのも心苦しいのですが。ええ、別に私がアキバの面倒なあれこれを押し付けられているのに、クシさんだけ郊外でのんびり過ごしてるのが恨めしいからとかそういった理由は全然ありませんので、ご心配なく」

とかいつもどおりの澄ました口調でさらっと言いやがって。

ちくしょう、私だってあれはあれで結構面倒なことが多いのだ。

特にヤエが色々やらかすし。

「つたく、1パーティーでアレ落としてこいとか、クラスティ君も中々に人使いが荒いよねえ、っていうか何で私が駆りだされなくちゃいけないんだか」

「〈D・D・D〉のメンバー多しといえども隠密行動が可能で近接戦闘もこなし、かつ大局をみつつ作戦行動が取れる回復職というのは貴重です。むしろ先輩以上の適任者はいません！ 今回のメンバー選出の際に私から隊長に要請を出していただけよう、おどしもといお願いさせていただきました！」

「・・・山ちゃんエ・・・」

こいつが元凶だったか。

なんなのだろうか、この山ちゃん。

普段は冷静な真面目っ子なのだが、時折こういった変なスイッチが入って奇行に走る。

「皆もさあ、こんな無茶な作戦はボイコットしようよ。別にギルマスや山ちゃんだからって無条件に言うこと聞かないんだしさ。いつから〈D・D・D〉はブラック企業の仲間入りをしたのさ？」

「いえ！さんささんと〈黒姫〉と作戦行動とか全俺会議にて賛成多数、満場一致ですから！」

「我らギルド内の希望者多数の屍を踏み超えて此処に立っている精鋭でゴザルよ！ 実際クシ殿に逝けといわれれば拙者、一人でもあの陣中に特攻する所存！」

「特攻MAJIDE！？」

「むしろこの逆境！ リアルオレを残して先に行け！ とかが期待されるこの逆境！ まさに逆境こそ好機！」

「山ちゃん、こいつら大災害後も相変わらずこんななの？」

「ええ、概ねいつも通りです・・・」

続k かない。

らいとすたっふ（後書き）

津軽 あまに先生のところの〈D・D・D〉が楽しそうで羨ましくて血迷いました。ごめんなさい。

追記…トチ狂って独立連載にまわしてしまいました！MAJIDE
！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5490v/>

雑文

2011年11月13日13時57分発行